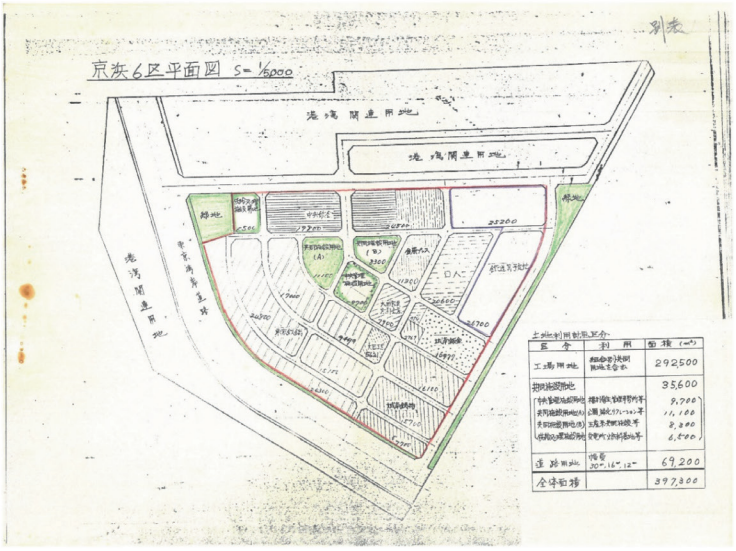
ISSN 2432-4159

法政大学 大原社会問題研究所 環境アーカイブズ ニューズレター

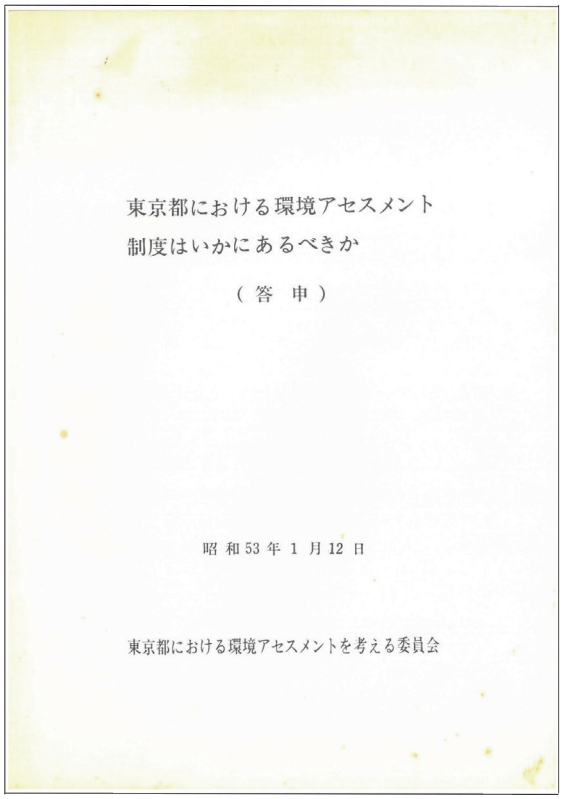
第9号
2023

CONTENTS

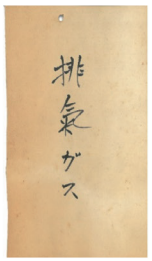
公害対策から環境政策へ（宇野淳子）…（1）
アーカイブズの「教育資源」化は可能か？（安藤聡彦）…（2）
アーカイブズの使い方―日本社会学会での活動を踏まえて（三井さよ）…（4）
活動報告（須田佳実）・本の紹介（山本唯人）…（6）　一歩ずつ階段を下りる（山本唯人）・資料公開情報（玉土大悟）…（7）
2023年活動報告・利用案内…（8）



0016-B4-051-007


東京都における環境アセスメント
制度はいかにあるべきか
（答　申）
昭和53年1月12日
東京都における環境アセスメントを考える委員会

0016-B3-031-008



0016-B5-066-013

0016-B3-044-011

公害対策から環境政策へ

東京都副知事や「東京都における環境アセスメントを考える委員会」の委員長等を歴任した船橋俊通氏が1970年代前後に職務上収受した文書からなる資料群。公害を制御しつつ産業を守るために工場の集団移転をしたり（B4-051-007）、都民の意見を聴きながら環境アセスメントの答申をまとめたりした（B3-031-008）ことを示す資料は主題ごとにボール紙（B5-066-013・B3-044-011）を付して紐で括ったかたちで、子の船橋晴俊氏により環境アーカイブズに寄贈された。

（受入番号0016　「1970年代東京都公害問題対策資料」）
（環境アーカイブズ専門嘱託（アーキビスト）　宇野淳子）

環境アーカイブズ ニューズレター
2024年3月1日発行　第9号
発行：法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ
〒194-0298 東京都町田市相原町4342　TEL：042-783-2098

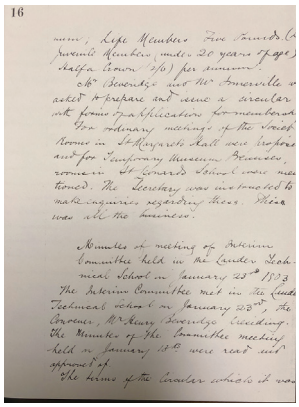
アーカイブズの「教育資源」化は可能か?

埼玉大学　教育学部教授　**安藤聡彦**

テーマを考える個人的背景

本稿では、アーカイブズの「教育資源」化は可能か、という問題について考えてみたい。ここで「教育資源」とは、「教育という営みを行ううえで価値ある資源」といった程度の意味を指す。「教育」とは大学を含む学校教育はもとより、社会教育をも含んでいる。アーカイブズを教育資源にすることが可能か、という問いは、現状ではそうなっていないが、そうすることに意味があるのでそうできないものだろうか、という問いかけ、ということになる。その問いかけをめぐる考察を行うにあたって、そもそもなぜそのような問いをたてるのか、その個人的な背景を記しておきたいと思う。

筆者は、院生時代からしばらくのあいだずいぶんアーカイブズの世話になったという経験を有している。当時、パトリック・ゲディス（Patrick Geddes, 1854-1932）というイギリスの都市計画とか環境教育の祖とされる人物の研究をしていたのだが、そのためにいくつものアーカイブズで資料を収集することが不可欠だったためである。主な資料群は、スコットランドのグラスゴウにあるストラスクライド大学の大学アーカイブズに収蔵されている「パトリック・ゲディス文書」というものであったのだが、それだけでは不十分なので、スコットランドの様々な大学や図書館をめぐり歩くことになった。忘れられないのは、ゲディスが取り組んでいた社会運動について調べていて、エディンバラ市立図書館地域史資料室で1880年代に彼が創始した団体の会議録（minute book）を見つけたときのことである。そこには、毎回の会議の出席者とかれらの発言の手書きの記録が残されており、当時ゲディスをはじめ活動の担い手たちが何を考え、何をしていたのかが手にとるように分かるのだ。現代日本で言えば「まちづくり」団体のような小さな組織の会議録が製本されて保存されていること自体が驚きだった。だが、ふと気づいてみると、多くのアーカイブズには絶え間なく人が出入りして、老いも若きもがカードで資料の所在を確認しながら、「18世紀の詩人○○の××時代の書簡を見たい」とか、「19世紀末のエディンバラの△あたりの写真を閲覧したい」といったことをアーキビストたちに相談しているのである。アーカイブズ利用は市民の暮らしの一部であり、そういう暮らしがあるからこそゲディス関連の資料もきちんと保全されている、ということを発見したのだった。地域の文化や環境の保存は、地域のアーカイブズと深く関連しているということをその経験を通して感じるようになった。



ゲディスがコミットした地域のナチュラリスト協会の議事録

では、日本ではどうか。様々な領域において公立・私立のアーカイブズが誕生していると思われるが、そこの資料はどのくらい一般的に利用されているのだろうか。例えば、今日各地の公害資料館には少なからぬ子ども・若者が訪れているが、利用の多くは展示の見学や語り部の講話の聴取となっていて、アーカイブズに収蔵されている資料の閲覧の機会はほとんどないということもしばしば耳にする。私自身が所属する公益財団法人トトロのふるさと基金というナショナル・トラスト団体でも、いまから10年ほど前に「アーカイブズ・プロジェクト」というプロジェクトを立ち上げ、ある一定時期までの資料をすべて点検し、必要なものはコピーをとり、フォルダ等に整理した。この作業によって、大事な資料をかなり系統的に保存することはできたが、あくまでも内部的な資料整理のため、外部からの利用を受け入れるというところにまでは至れていない。近年では運動をひっぱってきた方々が次々に引退されるなかで、本来的には資料を受け入れ、アーカイブズを拡充し公開する取り組みをしたいところなのだが、なかなかそこまで手が回らず、地域の一環境保全団体として自らのアーカイブズをどうするか、という課題は宙に浮いたままとなっている。

では、なぜアーカイブズの「教育資源」化は進まないのか。

「私的な資料」と「公共的な資料」との差違

アーカイブズを「教育資源」とするうえで、最大の壁はアーカイブズと教室との距離である。仮にアーカイブズが教師個人の家か、少なくとも学校にあれば、教師によるアーカイブズの利用可能性ははるかに高まるはずである。そして、言うまでも無く、その「距離」の根っこには資料の所有のあり方の問題がある。

筆者は、公害問題と向き合い公害教育に取り組んできた教師たちの自宅をしばしば訪問する機会を得

てきた。あらためて想い起こされることは、ほとんどすべての教師たちが自分自身の仕事部屋に大量の資料を収めていて、それらの資料を運動はもとより教育活動においても用いていたことである。沼津・三島の石油化学コンビナート反対運動のリーダーのひとりとして知られた西岡昭夫氏など、自宅では資料を保存しきれず、別の場所に二階建ての家を所有していて、そこの全体を資料庫として活用していた。1968年秋に日本ではじめて「水俣病の授業」に取り組んだことで知られる田中裕一氏もまた膨大な資料を所有しており、そこには文書や画像ばかりでなく、水俣湾の仕切り網の切れ端のような実物資料も多く含まれていた。要するに、資料はもともと彼らが運動や授業のための必要があって収集したモノであった。収集した本人にとっては収集するにあたっての問題意識があったから、その所在場所さえ明らかであれば、かれらは必要に応じてそれを取り出し、目的に沿って利用することはいとも容易なことであった。

資料庫での故西岡昭夫氏
（曽貧氏撮影）

だが、資料は誰かによって保存されなければ生き延びることができない。資料がアーカイブズに寄託されるということは、「私的な資料」が「公共的な資料」になるということを意味し、それによって資料は生き延びられることになるのだが、それは同時に所有者と利用者とが分離されるということを意味する。利用者となる教師の側からすると、アーカイブズ資料を授業で用いるためには、意識的に「公共的な資料」としてのアーカイブズにアクセスし、その資料群の成り立ちや内容を理解し、必要なときに学習材として利用できるように予めコピーを取得したり、当該資料へのアクセス権を確保するなど、様々な事前準備をしておくことが必要となる。要は、アーカイブズの教師自身による探究とそれを通しての学習材としての利用可能性の確保が求められることになる。だが、多忙をきわめる教師たちには、そのための時間を確保すること自身が容易ではない。何よりも教師たちの手元には、教科書や資料集をはじめ様々な資料があるので、アーカイブズへアプローチすることはそうした既存の資料では得られない学びへの展望や期待が教師の中に存在していることが欠かせないということになる。「学習指導要領遵守」の徹底化が求められる現在の学校現場において、そうした学びの発展がときとして軽視、場合によっては問題視されがちであるという学校をとりまく今日的状況の影響もすこぶる大きいだろう。

アーカイブズを「教育資源」化することの意味

では、そのような難しさがありながらもアーカイブズを「教育資源」化することの意味はどこにあるのだろうか。この問題を考えるうえで、アメリカの高等教育における伝統的な教養教育科目である「作文」（composition）の教師たちがこの20年あまりアーカイブズの積極的利用に取り組んでいることはまことに興味深い。ロング・アイランド大学のマトニックは、次のように指摘している。

> 学生たちをアーカイブズに差し向けることは、学部学生の研究に新たな通路を切り拓くことを意味する。私の学生たちは、少数の第一次資料を精査することを通して、より観点を絞り込み、こまやかな議論の展開へと至る緻密な観察力と読解力とを培うことになった。学生たちに作文を書くうえでの大きな元手を与えるために、私はかれらが地域ないし私的なことがらと結びつけやすい文書を意図的に選択するようにしている。学生たちは熱心に書き、アーカイブズのコレクションに関心を寄せることによって、より興味深く意味深い文書を書き上げるのである[1]。

「作文」でのアーカイブズの利用は、学生たちの文章作成力、研究能力、批判的思考力等の向上ばかりでなく、学生たちも参加してのアーカイブズそのものの革新や学生たちの社会的課題へのコミットメントなどにも広がっているという[2]。筆者自身、水俣病センター相思社が編集した『資料から学ぶ水俣病[3]』に収録されている第一次資料を学習材として用いたとき、学生たちの議論が活発化することを経験してきた。

アーカイブズの「教育資源」化は容易ではない。アーカイブズと教育機関との対話と協働によってその具体化が進められていくことを願いたい。

---

1 Mutnick, D., “The Appeal of the Archive: Engaging Students in More Meaningful Research”, *TeachArchives.org*, 2016, https://teacharchives.org/articles/more-meaningful-research/（2024/1/5 最終閲覧）
2 Graban, T.S. et al. eds., *Teaching through the Archives: Text, Collaboration, and Activism*, Southern Illinois University Press, 2022
3 遠藤邦夫編『資料から学ぶ水俣病；水俣病事件の基礎資料15タイトル～相思社資料室～』（前編／後編）、一般財団法人水俣病センター相思社、2016年／17年

アーカイブズの使い方
―日本社会学会での活動を踏まえて

法政大学　社会学部教授　**三井さよ**

質的アーカイブズの形成・継続・活用：
日本社会学会・社会学教育委員会での取り組み

2021-23年度の日本社会学会における社会学教育委員会では、立岩真也委員長（当時・立命館大学）のもと、質的データのアーカイブズの形成・継続・活用をテーマとした。

定量的分析を行うための調査票調査については徐々にアーカイブズ化され、二次分析が多く行われ始めているのに対して、質的アーカイブズについては、個々の小さな民間あるいは大学の試みはあるけれども、学会として取り上げる機会がなかった。社会学を、職業的研究者だけのものではなく、ひろく一般に開かれたシビル・サイエンスとして育てていくためにも、質的アーカイブズの形成・継続・活用を学会としてテーマに掲げることも重要なのではないか。

立岩委員長が長年、「生きて在る」をテーマに多様な市民運動・社会運動に関する質的アーカイブズ作りに取り組んできたこともあり、打ち出されたテーマだった。それまでにも立命館大学で開かれたシンポジウムでは、「作った」側の諸事情や思い、経緯などが語られ、記録されている（詳しくは『立命館生存学研究』vol.3　http://www.arsvi.com/m/rsz003.htm）。

私はこの委員会で副委員長を務め、2022－23年度と二回にわたる日本社会学会大会での社会学教育委員会テーマセッション「質的アーカイブについて」に出席、二回目は企画を担当した。この経験から私が強く感じるようになったのは、大学のアーカイブズがこれから生き残るためにも、アーカイブズの「使い方」を多様に考えていく必要性である。

「生きて存るを学ぶ。蔵　生存学研究所・アーカイブ」のウエブサイト

大学内アーカイブズの形成とこれから「使う」ために

社会運動の資料は、1960年代から70年代の資料が重要になってくるが、これらの一部がこの20年ほどの間に次々と大学に集められつつある。社会運動や市民活動の大学でのアーカイブズといえば、法政大学大原社会問題研究所の環境アーカイブズをはじめとして、立教大学の共生研究センター、立命館大学の生存学研究所などが挙げられるが、ここにはもともとは民間で作られていたアーカイブズの資料も多く集まってきている。

そうした中、問われてくるのは、これらの大学内のアーカイブズの「使い方」を拡大すること、そしてそれによって存在意義を打ち出していくことだろう。これから若い世代の研究者たちが、実際にこれらのアーカイブズをどう活用して研究を進めていくのか、あるいは職業的研究者だけでない活用の仕方を考えていくならどのような方法があるのか。

もともと、市民運動ベースで作られたアーカイブズでは、過去の資料は歴史的・学術的資料というより、もっと素朴に、過去に歩んだ誰かの足跡だった。そのため、資料室の奥に保管されるというより、本棚の中や「その辺」に置かれていて、いま新たに運動に取り組もうとする人が偶然手に取り、自分なりのやり方を作り出すために参考にするようなものだった。

それに対して大学という場でのアーカイブズでは、資料の数々はまさに「資料」という学術的・歴史的に価値あるものとして、大切に保管することになる。通常の図書館よりもさらに奥まったところに、基本的には手袋をしながら触るようなものへと「資料」化していく。

こうしたことが市民運動の資料を「使えない」ものとしていくと非難するのは簡単だが、逆にいえば、市民運動ベースで場を維持するのが難しいからこそ、大学という場に寄せられているのでもある。だとすると、以前のような「使い方」も参考にしながら、大学という場での公的なアーカイブズならではの「使い方」、そしてそれをどう拡げていくかを考えていく必要がある。上述した日本社会学会でのテーマセッションで出てきた議論を踏まえつつ、三つの論点を挙げておきたい。

三つの論点―個人情報保護、歴史的背景の把握、アクセシビリティ

ひとつには、個人情報保護やプライバシーの問題にどう取り組むかという点である。先に挙げた日本社会学会のテーマセッションで、清原悠さん（立教大学）が、実際にアーカイブズを用いて市民活動の歴史をたどっている立場から述べたのは、資料のプライバシーの問題は、運動にかかわっていた当事者たちと協力して取り組んでいくのがもっとも早道だということだった（清原2023）。たとえば写真ひとつにしても、誰が映っているのか、公表してもいいものなのかなど、必要な情報を集めるにあたっては、運動の当事者だった人たちがもっとも全体を把握できていることが多い。

これも個々の研究者たちが行うのはもちろんだが、アーカイブズの側でやれる部分もあるだろう。資料を提供してくれた人たちに、どの資料なら公表してもよさそうか、どの資料については確認が必要そうかなど、当事者たちだからこそわかる区分を確かめておくことは、後々に資料を「使える」ものとしていく上で重要な意味を持つだろう。

もうひとつには、同じテーマセッションで環境アーカイブズにかかわる加藤旭人さん（一橋大学大学院）が提起していたことだが、なぜその資料がここに集約されていたのかという視点を、資料分析に際して持ち込むことである（加藤2023）。ある資料を単体で捉えるだけでなく、この資料とその資料がひとつのセンターに集められていたということの時代的・歴史的背景や当時の組織のありようなども、分析の際に視野に入れることによって、当該の資料が持つ意味を多層的に描き出すことにつながる。これは、大学のアーカイブズだからこそできることかもしれない。

最後に、資料のアクセシビリティの問題もある。同じテーマセッションに登壇した川端美季さん（立命館大学衣笠総合研究機構生存学研究所）は、車いすユーザーをはじめとした多様な人たちにとってアクセスしやすい状況にしていかなくてはならないと問題提起していた（川端2023）。先に述べたように、大学のアーカイブズは資料を「資料」化してしまうため、結果的にアクセスしにくいものになってしまうことは否定できない。これは多様なニーズを有する人たちへの情報保障といった問題に限られることではない。一般の人びと、あるいは学部生などが訪れて気軽に資料を見られるような場にしていくこともまた、含まれるだろう。

この点にアプローチしていくために必要なのは、ひとつにはデジタル化なのだろうが、もうひとつには人的資源だと私は思う。情報保障を必要とする人や車いすユーザーなどへの協力も、スペース確保や資料のデジタル化などが現状として難しいのであれば、まずは「人」が対応・協力していくしかないだろう。それに、たとえば学部生や一般の人が訪れたときに、どれだけ気軽に相談できる人がいるかは、近づきやすさを大きく左右する。

さらにいうなら、訪れやすくなるようなイベントや企画を立てていくことも求められるのではないか。もともと市民活動や社会運動のアーカイブズは、先人の辿った足跡として資料を活用していた。いまの学生からすれば、1970－80年代の社会運動の資料は決して身近とは言い難いだろうが、そこに適切な解説や授業との連動を試みることによって、学生たちが資料を学術的なものとしてだけでなく、先人の辿った足跡として捉えかえす機会にしていくことも考えられるかもしれない。これは、教育機関としての大学に何ができるかというチャレンジでもある。

アーカイブズを今後活かしていくためには、単に資料を整理・保管している場所として扱うのではなく、より積極的に「使う」道を探る場へと、アーカイブズ自体を活性化させることが必要である。そのためには、人材の確保や教育側との連携も不可欠である。そうすることが、現在成立しているアーカイブズをそれとして活かし、私たちの社会の重要な記録群を散逸させないためにも、そして研究を研究者だけのものとせず、研究の裾野を広げていくためにも、望まれるのではないだろうか。

文献

加藤旭人2023「アーカイブズの活用の方法論的基盤を探る――東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料から」日本社会学会第96回大会　社会学教育委員会テーマセッション「質的アーカイブについて」

川端美季2023「生存学研究所のアーカイヴィングの展望とその課題」同上

清原悠2023「社会運動のアーカイブズの活用は何を豊かにするか――新宿「模索舎」の50年史をめぐる調査研究から」同上

活動報告

シンポジウム
「「市民活動資料」収集・整理・活用の現場から―法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ、立教大学共生社会研究センター、市民アーカイブ多摩」

2023年11月18日（土）、市ヶ谷キャンパスにおいて3館合同シンポジウムが開催され、約60名が参加した。

第一部は各館からの活動報告である。まず、環境アーカイブズから加藤旭人（RA）と宇野淳子（アーキビスト）が報告した。同館の所蔵資料は、薬害関係・開発問題・原発反対運動に大別でき、それらを繋ぐ資料の総体として「市民活動資料」は捉えられる。その一つに「旧東京都立多摩教育市民活動サービスコーナー所蔵資料」群がある。加藤は資料整理者として、同資料群がミニコミのみならず、図書・新聞・雑誌という多様な資料から構成されていることを強調した。サービスコーナーが「資料と活動の交流拠点」であったことを原点にすえ、活動と資料整理を往還的に進めることが重要であるとした。宇野は資料群の閲覧利用状況について、他機関からの紹介や自治体史編さん室からの利用が主で、内容・タイトル順に分類しておらず検索しづらいという課題と解決策を述べた。

次に、共生社会研究センターの平野泉（アーキビスト）が報告した。センターは「市民活動資料コレクション」として27万8,500点をこえる「ミニコミ」を所蔵している。同館は研究者の利用が多いが、研究成果や効率とは異なる、読み手と書き手が一人の「私」として出会うメディアとしての読み方が重要なのではないかと提起した。

最後に、ネットワーク・市民アーカイブの江頭晃子が報告した。市民アーカイブ多摩は「市民活動資料を収集・整理・保存し続ける運動体」であり、同館では日々増えるミニコミを分類別に開架している。資料を探す過程では対話が生れ、読者に問いかけるというミニコミの双方向性がより活きるという。他方、収集方針は即人的な側面があり網羅的ではないという課題も共有された。

第二部では質疑応答・全体討論が行われ、参加者とパネリスト双方向の議論が交わされた。活動／運動という言葉の区別、ミニコミとZINEの区分、地域図書館との関係、写真資料の公開利用、デジタル資料の扱い方、2000年代という時代状況がアーカイブズに与えた影響など、様々な論点が提出された。

（環境アーカイブズRA 須田佳実）

本の紹介

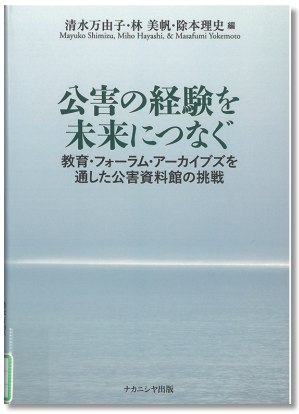
◆清水万由子・林美帆・除本理史編『公害の経験を未来につなぐ―教育・フォーラム・アーカイブズを通した公害資料館の挑戦』ナカニシヤ出版、2023年.

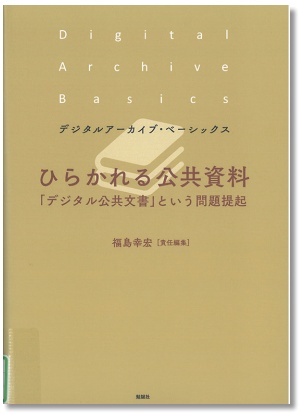
本書には、環境アーカイブズと関わりのある以下の3論文が収録されています。清水善仁「公害経験の継承と公害資料―アーカイブズとしての公害資料館」、川田恭子「社会変革に向けた社会運動アーカイブズの役割―薬害スモン被害者団体記録から」、山本唯人「公害資料の活用を促す仕組み―環境アーカイブズの活動から」。清水論文では、公害資料の所在状況調査を踏まえて、公害資料の種類や範囲、管理の方法などが総論的に述べられています。川田論文では、環境アーカイブズが所蔵する「スモンの会全国連絡協議会・薬害スモン関係資料」を事例に、公害経験を多面的に理解し、継承するために、社会運動アーカイブズの重要性が指摘されています。山本論文では、資料の活用を促す取り組みとして、資料寄贈者への聞き取りや大学のゼミと連動した「ガイダンス」の経験が紹介されています。

◆福島幸宏責任編集『ひらかれる公共資料―「デジタル公共文書」という問題提起』勉誠社、2023年.

本書には環境アーカイブズの活動に関わる論文、山本唯人「「デジタル公共文書」と民間資料―市民活動資料の視点から」が収録されています。本論文では、市民活動資料の公共性と公開方法の関係、および、資料の特性を踏まえて、段階的にデジタル化を進める必要性などが論じられました。

（法政大学大原社会問題研究所特任准教授　山本唯人）





コラム

一歩ずつ階段を下りる―アーカイブズという方法の教訓

法政大学大原社会問題研究所特任准教授（環境アーカイブズ担当） **山本唯人**

アーカイブズの使い方を説明するとき、立ちふさがる問題の一つに、検索方法の複雑さがある。2022年度から社会学部の協力ではじめた、新入生対象の環境アーカイブズの「ガイダンス」でも、必ずといっていいほど、この問いが出る。資料とは何か、図書館で本を探すのではダメなのか、そもそも、何のために調べるのかが分かる前に、専門的な検索方法を延々と説明されても、聞き通せる学生はまずいない。いっそ、資料を手に取って読むワークショップにしぼって、検索方法はさらっと触れるだけでもいいのではないか。そんな指摘を、ゼミ担当の先生から受けたこともあった。

アーカイブズの検索は、一歩ずつ階段を下りるように、進める仕組みになっている。アーカイブズが所蔵する資料群の一覧から、どの資料群を閲覧するかを定めたら、「資料群概要」を読んで、その資料群の来歴や大まかな内容を把握する。次に「ファイル目録」を開くと、ファイル単位で、その資料群がどのような種類・タイトルの「ファイル」によって構成されているかが分かる。最後に、「このファイルを見よう」と定めたら、「アイテム目録」を開いて、ぱらぱらっとファイルをめくるように、そこに綴じ込まれた、一点ずつの文書（アイテム）のタイトルを見る。実際にこの順番で探すかは別として、こうした検索の仕組みは、たくさんの文書を一旦ファイルにまとめ、そのファイルを棚に並べて資料全体を管理する、多くの組織や事務所で採用される資料の整理・保管方法と合っており、一度覚えてしまうと、きわめて合理的に「見たい資料」の当たりを付けられる。

ところが、インターネットのキーワード入力＋エンターキー一発の検索に慣れている現代人―若者に限らず、「プロの研究者」も含めて―に、この検索方法はなじみが薄く、慣れるのに時間がかかるらしい。どうしても、階段を二段、三段と抜かして、「ほしい情報」にいきなりたどり着こうとするために、却って情報のウエブに足を取られていることに気づかない。ところが、あえて中ぐらいの階段を経由すると、結果的に早く、迷わずに、目的地までたどり着くことができる。

アーカイブズの方法とは、投網の裾を、手綱を引いて少しずつ狭めるように、知りたい情報の範囲を絞り込んでいくことだと言える。ばらばらの情報を、中ぐらいの範囲でまとめるのが「キーワード」の働きだとすれば、性急にキーワードを打ち込む前に、どのキーワードを使えばよいかを、落ち着いて、根拠を示しながら探すことの大切さということでもある。これが、混乱した情報-デジタル社会を生き延びるのに、不可欠な教養であることが共有されれば、アーカイブズはもっと広く、そして深くまで、現代の社会に受け入れられていくだろう。

資料公開情報（受入番号0042）ミニコミ（ファイル・施設・広報）の公開

環境アーカイブズRA　玉土大悟

2023年度、環境アーカイブズは、受入番号0042「旧東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー所蔵資料」（「東京都立多摩社会教育会館旧市民活動サービスコーナー所蔵資料」より2023年11月29日に資料群名を変更、以下「多摩資料」）の追加公開をしました。

今回の追加公開では、⑴市民団体の基本情報がまとめられた「ミニコミ（ファイル）」の資料、⑵施設紹介等のパンフレットが集められた「ミニコミ（施設）」の資料、⑶広報誌がまとめられた「ミニコミ（広報）」の資料、以上の3種を公開しました。

また、「ミニコミ」「図書・冊子」の目録にはテーマを示す番号（旧分類番号）を追加しました。資料群概要記載の「表1 市民活動サービス―コーナー図書分類表」を基に、「ミニコミ」「図書・冊子」のテーマを照合することが可能です。

これをもって、「多摩資料」のミニコミ5052ファイル、図書・冊子11992ファイル、雑誌202タイトル、新聞22タイトルは全面公開されました。

2023年活動報告

◆ 日誌

1月10日 資料整理研究会「大原雑誌・多摩市民活動資料の特集に向けて」、報告：加藤旭人

2月9-11日 倉敷・大阪視察に出張（みずしま財団・あおぞら財団・あまがさきアーカイブズ等）　山本唯人・加藤旭人・Kimberly・須田佳実・（一部オンライン参加）宇野淳子

2月28日 資料整理研究会（公開オンライン）「『大原社会問題研究所雑誌』「高度経済成長のなかの薬害問題―サリドマイド事件関係資料を読み解く」特集をふり返る―執筆者による相互討論」、報告：山本唯人・長谷川達朗・松枝亜希子・川俣修壽

3月6日『法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズニューズレター』第8号発行

3月7日 HOSEIミュージアムデジタルアーカイブに目高舎関係資料（画像2572コマ）の登録完了（非公開状態）

3月16日 大学史資料協の見学会

3月30日「受入番号0042 旧東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー資料」所収のシリーズ「新聞」公開

4月24日 2023年度事業計画を作成

5月1日 宇野淳子「市民と共にある環境アーカイブズ」『日本の科学者』58（5）刊行

5月22日 藤田理雄氏（元0047原子力資料情報室視聴覚資料担当RA）来館・聞き取り

5月30日 NPO法人アートフル・アクション訪問、加藤旭人・宇野淳子・山本唯人

7月3日「2023年5月8日以降における環境アーカイブズの新型コロナ対策」施行

7月18日 NPO法人アートフル・アクション「たましらべ」学習会で加藤旭人・宇野淳子報告

8月7日 市民アーカイブ多摩スタッフ江頭晃子・杉山弘・堀内寛雄・町村敬志各氏来館、目録の連携について打ち合わせ

9月4日 安藤聡彦氏と院生2人来館、教職大学院授業の打ち合わせ

8月31日 RA Fung Wan Yin Kimberly退任

9月12日 資料整理研究会「「0016 1970年代東京都公害問題対策資料」の整理状況について」、報告：宇野淳子

10月1日 RA玉土大悟着任

10月3日・10日・17日・31日 ガイダンス　中村尚樹・愼蒼宇・中筋直哉・惠羅さとみ各氏ゼミ

10月3日 大門信也氏とオンライン公開研究会、大原雑誌特集の件で打ち合わせ（zoom）

10月7日 NPO法人アートフル・アクション「たましらべ」メンバーによる見学会

11月18日 シンポジウム「「市民活動資料」収集・整理・活用の現場から―法政大学大原社会問題研究所環境アーカイブズ、立教大学共生社会研究センター、市民アーカイブ多摩」開催、於法政大学市ヶ谷キャンパス

11月20日 資料整理研究会「多摩資料の振り返りと引継」、報告：加藤旭人

11月27日 舩橋晴俊インタビュー録音寄贈の件で小林多寿子氏来館

11月29日「0042旧東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスコーナー資料」全面公開

11月30日 RA加藤旭人退任

12月16日・17日 公害資料館連携フォーラムin福島に出張　山本唯人

12月19日 ビデオテープ保管用ドライボックス購入・納品

利用案内

開室時間：平日9：00～16：30

土日祝日および大学が定めた休業日は、休室となります。また、夏季期間等に開室時間が変更になる場合があります。ホームページの「開室カレンダー」をご確認ください。

閲覧・見学をご希望の方は、事前に電話もしくはメールにて、来室日時をご予約下さい。

法政大学大原社会問題研究所・環境アーカイブズ

〒194-0298
東京都町田市相原町4342
法政大学多摩キャンパス総合棟5F
電話：042-783-2098
メール：k-archives@ml.hosei.ac.jp
ツイッター：@k_archives1
ホームページ：https://k-archives.ws.hosei.ac.jp/

多摩キャンパス

82	大宮駅	JR埼京線快速―約32分	新宿駅	京王線準特急―約40分	めじろ台駅	バス―約10分	
114	千葉駅	JR総武線快速―約39分	東京駅	JR中央線中央特別快速―約53分	西八王子駅	バス―約22分	
25	八王子駅	JR中央線―約3分			西八王子駅	バス―約22分	
28	町田駅	JR横浜線―約15分			相原駅	バス―約13分	
62	横浜駅	JR横浜線―約13分	*新横浜駅	JR横浜線―約36分	相原駅	バス―約13分	

※■内の数字は、総所要時間（乗り換え時間を除く）を表す。　★新横浜駅は経由で、乗り換えではありません。

※法政大学公式ウェブサイトより転載